若い人たちの気に入るものを入れないわけには……

ベルナルド・ガアヤン

We will Attract Young Generation by Fashionable Goods

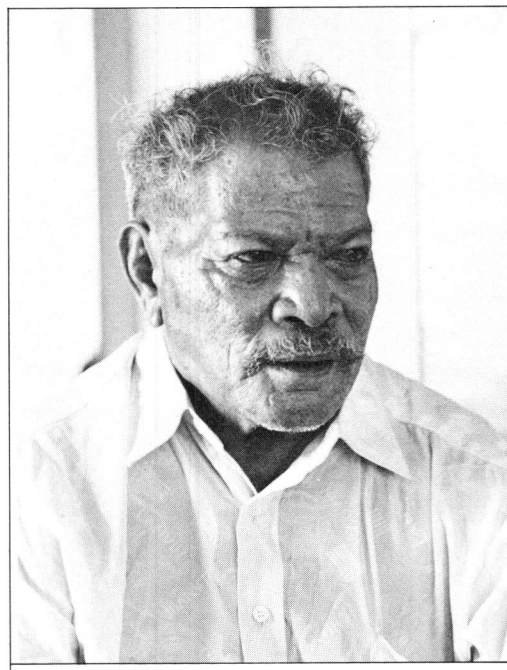
Bernard Gaayan

荻原　今回の遠征航海のご成功おめでとうございます。先日、新聞でガアヤンさんの記事を拝見いたしまして、是非ともお会いしたくなってやって参りました。いろいろお話を伺わせて頂けたらと思います。さっそくでございますが、「ペサウ」号というカヌーの名前はどういう意味でしょうか。

ガアヤン　ヤップ島はサンゴ礁に囲まれています。そして、その出入口が7つあります。その一つの名前がペサウで、その意味は「リーフの外」ということです。リーフの内側はパーチェルです。

荻原　そうしますと、ペサウというのは島の外、外の世界ということですか。今回、ヤップ島から日本へでる千キロメートルの航海を思い立たれた動機はどんなところにあるのでしょうか。

ガアヤン　わたしは、タマングさん（同席、パーチェル村の酋長）とヤップ島の古い伝統を守りたいといろいろなことをやってきました。伝統的なやり方で大きな集会所をつくったり、カルチャーセンターをつくったりしました。今度も父祖たちの舟つくりの技術を若い人たちに伝えたいと考えました。わたしは舟大工の技術をもっていますが、舟を動かす航海術はこちらのタマングさんの方がよく知っているというわけです。クルーは全部で10人です。



ミクロネシア・ヤップ諸島・マープ島の前総酋長。61年7月、村の若者ら7人を率いて、大型カヌー「ペサウ号」で、ヤップ-小笠原間3,000km 1ヵ月の大航海を行う。72才。

荻原　今度のカヌーを造るのに長い時間とご苦労があったそうですが、今ではもう伝統的なカヌーは全く使われていないのでしょうか。

ガアヤン　遠洋航海ではもうカヌーは使われることはありません。定期航路や大型の船があります。魚獲りにも動力船が使われていますが、カヌーの方はオイルが切れたり、エンジンが故障したりすることがありませんから、いいです。

荻原　昔、ペサウ号のようなカヌーで遠洋航海がさかんに行なわれたのでしょうか。一番遠い昔の航海の記憶はどんな風に伝えられていますか。

ガアヤン　（しばらくタマングさんと話してから）ヤップ島には石貨があります。昔、島の若者が二人黒蝶貝や白蝶貝を求めてパラオやフィリピンに出掛けて行きました。石貨はラーイ、くじらのことです。ヤップとパラオの途中で、二人はくじらを見ました。向うの島に着いた若者はそこに石を見つけました。二人は石で一番美しい形のものを創ろうとしました。途中で見たくじらを彫ろうとしたのです。ところがちょうどその時、空に満月が上りました。あれがもっと美しいではないか。二人は満月を形にしたのです。

荻原　いいお話ですね。でも、あの大きな石貨をどうやってヤップ島まで運んだのですか。

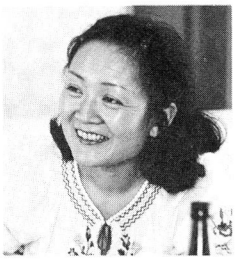
ガアヤン　ラーイの真中に丸い穴がありますね。あの穴に丸太を通し筏を組んで船で曳いてきたのです。

荻原　なるほど。そして、島に着いてからは、どのように村まで運びましたか。

ガアヤン　島に着くと、偉い村と小さな村の間で取

インタビュアー
荻原 眞子

本学会誌編集委員。東京国際大学教養学部助教授。専門は文化人類学、北アジア民族学。特に、アイヌの比較民族学的研究を行っている。最近では現代社会における交通、家族、科学技術と人間、生と死などの問題に関心をもつ。



り合いのけんかが起こりましたが(笑)、いろいろな方法があります。ロープをつけてコロで動かすのです。石貨の値打ちは大小によるのではなく、いわれのあるものが大事にされます。タマングさんのところには立派なのがあります。ヤップの銀行は安全ですよ（笑)。

荻原　そうでしょうね。車で盗み出すわけにいきませんものね。車といえば、ガアヤンさんはこれまでご自分の村に車が入ることをお許しにならなかったそうですが、それはどうしてですか。

ガアヤン　道がなかったからでしょう。村の入口に丸太の橋がかかっていて、車はそこまでで、村へは歩いて入ってこなければなりません。でも今は、観光客のために村の山側に車を通してタマングさんの村へ行けるようにしようと考えてます。

荻原　観光客のためですか……。

ガアヤン　町には、美味しいものも沢山ありますし（ガアヤンさんはビールが殊の外お気に召している由）……わたしと若い人たちの間に特に大きな考え方のちがいというのはありませんが、若い人たちの気に入るものを入れないというわけにはいきません。

荻原　お若いクルーの皆さんはどんなお仕事をしていらっしゃるのですか。

ガアヤン　特に仕事というのはありません。

荻原　ところで、ヤップ島には車の台数はどれぐらいありますか。

ガアヤン　（しばらく黙してから）島の大きさを考えると日本よりも多いかも知れません。町には政府や観光客用の車、民間の車、スクールバスが走っています。

荻原　学校へはスクールバスなのですか。

ガアヤン　小学校は村のなかにあります。中学校、高等学校は町です。それを卒業すると試験を受けてグアムやポナペ、ハワイのカレッジに行きます。もっと優秀な子はアメリカです。わたし自身の気持を言うと、島が小さいのに高等教育を受けてどうなるのかと思います。帰ってきても職がありませんから。

荻原　それはとても大きな難しい問題だと思います。ここで、何とお応えしてよいかわかりませんが……。ところで、ガアヤンさんのお孫さんが埼玉県にいらっしゃると伺いましたが……。

ガアヤン　それはそうです。日本語を勉強しています。本人は医者になりたいと思っているのですが、医者は村のわれわれのために一番必要です。

荻原　話は変わりますが、村での大きな現金収入源はコプラですか。

ガアヤン　そうです。コプラ200個ほどを袋に詰めたのが20ドルぐらいで、値段が上がったり下がったりします。ヤシの実はいくらでも落ちています。

荻原　それは村から運び出す時には車か舟を使うのですか。

ガアヤン　村の入口のところか、舟のところまで運んで行くのです。

荻原　最後に、日本へいらしたのは何回目ですか。

ガアヤン　五回目です。

荻原　日本で一番お気に召さないことは何でしょう。

ガアヤン　（また、しばらく考えてから）音です。

荻原　よくわかります。今の日本の生活にはもう真の静けさがありませんから。

ガアヤン　ヤップでは満月の夜には、新聞を広げて読むことができます。(「パーティの村にはヤシの葉を編んだテーブルの上にバナナの葉の皿をのせますが、その葉がスコールに洗われて実に清潔なんです。埃が舞い上るということがありませんから。やがてあそこへ車を入れなければならないのは、時代の波でしょう」と野村先生ご夫妻は付け加えられた。)

インタビュー後記

（このインタビューはガアヤン船長と八人のクルーが寄寓していた備中高梁の郊外にある野村医院で行なわれた。航海長タマング氏と野村先生ご夫妻が同席された。ガアヤン氏と旧知で、ヤップ島訪問十数回という野村先生ご夫妻はヤップ島の「南海の楽園」さながらの美しさは島伝いの舟行によってこそ満喫し得ると実感込めて繰り返し強調された。にこやかに耳を傾けている風貌正しく海の猛者、ガアヤン氏の胸中は、サンゴ礁の外から寄せ来る文明の荒波に、今、どんなにか揺れ動いていることだろうか。

（昭和61年7月22日実施））